

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題——「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉——」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題
——「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉——

野呂有子

はじめに

かつて論者は、「ジョン・ミルトン(1608-1674)の凄さの一つは、彼の作品が絶えず後代の作家たる読者たちを突き動かし、脱構築された、彼/彼女自身の〈楽園喪失〉の物語を語る作業・語り直しの作業へと向かわせるところにあるのではないだろうか。そして、『楽園の喪失』(1667)の脱構築作業とは、とりもなおさず、〈楽園回復〉の作業に他ならないのである」と述べた。¹

たとえば、児童文学の分野においては、C. S. ルイス(1898-1963)の『ナルニア国年代記』(1950-1956)のほか、F.H.バーネット(1849-1924)の『秘密の花園』〔原題 *The Secret Garden*〕(1911)、フリッパ・ピアス(1920-)『トムは真夜中の庭で』〔原題 *Tom's Midnight Garden*〕(1958)等においては明らかに〈失われた楽園〉を回復させようという、言わば〈楽園回復〉の意図が窺われるのである。また、ルイス・キャロル(1832-98)の『不思議の国のアリス』(1865)ではトランプの国の庭は、ある意味では原一楽園のカリカチュアとして提示されている。本論では、一昨年、昨年の『最後の戦い』、『秘密の花園』に続いて、『トムは真夜中の庭で』を取り上げて作品中に描かれた庭とその意味について考察する。²そして、今回の作業も前回、前々回に引き続き、『楽園の喪失』との相互一テキスト性を論じる作業となる。

1. トムの〈楽園喪失〉

仮に『楽園の喪失』が「創世記」(『聖書』の最初の書)第 3 章 1-24 節の人類の始祖アダムとイヴの物語を、いわばミルトン流に解釈した作品であると言うなら、これとは対照的に『トムは真夜中の庭で』は「黙示録」(『聖書』の最後の書)第 10 章 1-6 節をピアス流に解釈した作品であると言い得るのではないだろうか。直哉に言えば、『トムは真夜中の庭で』は、原罪を宿命として背負う男女が、「庭」を媒介としていかにして共感し得るのか、その極限を聞き直している作品である。10 歳の少年は、80 歳の老婆と共感し得るのか。彼女もかつては〈自分と同じ子供であった〉という事実をどこまで理解し得るのか。老婆のかつての遊び場である庭が、たとえ今はもう存在しなくとも、その庭がいかに素晴らしい庭であったかを少年はどこまで認識し得るのか。老婆の心の中に内在化された庭を少年が理解するためにはいかなる意志疎通手段が存在し得るのか、という問題である。

主人公の少年トム・ロングは夏休みを待ち望んでいた。弟のピーターと裏庭の林構の本の上に二人の秘密の隠れ家を作る計画を立てていたのだった。ところがピーターが麻疹に感染した。トムは潜伏期間にあるのか、感染していないのか判断がつかぬために、子供のいないグウェン叔母夫婦のアパートに預け

1 「『秘密の花園』におけるミルトンの主題——「へそ曲がりのスコットランド女王」から「第二のイヴ」へ——」『東京成徳短期大学紀要』第 30 号 (1996 年 3 月)、p. 45.

2 「『ナルニア国年代記』におけるミルトンの主題——『最後の戦い』を中心として——」『東京成徳短期大学紀要』第 29 号 (1995 年 3 月)

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と
〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

られることになってしまう。

If standing alone on the back doorstep, Tom allowed himself to weep tears, they tears of anger.
He looked his good-bye at the garden, and raged that he had to leave it——leave it and Peter...
In this last [plot] the apple — tree grew: it was large, but bore very little fruit, and accordingly
the two boys had always been allowed to climb freely over it.(1)³

裏庭の戸口のところに一人で立ちつくしながら、トムがもし涙をながしたままでいたとすれば、それは怒りの涙だった。トムは別れを告げようと庭を見わたしながら、庭と——庭と、しかもピーターとも——別れなければならないことに激怒していた。……この最後の空き地には林檎の木が生えていた。大きな木だが、ほとんど実がならないので、二人の少年はいつでも自由に木にのぼることが許されていた。

4

上は小説の冒頭からの引用である。この箇所は『楽園の喪失』のまさに最終部を思い起こさせる。

They looking back, all th' Eastern side beheld
Of Paradise, so late thir happie seat,

.....

Som natural tears they drop'd, but wip'd them soon; (ll.641-645)⁵

ふたりはうしろをかえりみ、いままでかれらの

ききわ
幸いの住みかであつた楽園の東側を見やった。

.....

ふたりは思わず涙。がすぐにうちはらう。⁶

住みなれた庭に別離を告げなければならない状況に追い込まれ涙する、という点で主人公トムは人類の始祖アダムとイヴを思わせる。『トムは真夜中の庭で』という物語は、『楽園の喪失』の最終部を受けた形で語り始められるのである。

しかしそれぞれの物語において主人公たちの置かれた状況は微妙に実になっている。『楽園の喪失』において、アダムとイヴは楽園を追放される。しかし一人で追放されるのではない。愛し合う二人が引き裂かれることはないのである。さらに二人が追放されるのは、二人にその原因があったからに他ならない。それゆえ、追放される二人には怒りはない。これに対してトムは良き遊び相手である弟のピーターと引き離され

³ テキストは、Philia Pearce, *Tom's Midnight Garden* (1958 rpt. 1992, Harper Trophy)を使用。以後、引用文の後の括弧内の数字はこの版のページ数を示すものとする。

⁴ 日本語訳は高杉一郎訳『トムは真夜中の庭で』(岩波少年文庫、1992年)を参考にしつつ、論者が訳した。

⁵ テキストは John T. Shawcross 編、*The Complete Poetry of John Milton* (1963 rpt. 1972, Anchor Books)を使用。

⁶ 日本語訳は、新井明訳『ミルトン 楽園の喪失』(大修館書店、1978年)を使用。

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

て庭から「追放される」のである。その原因はトムにはない。ここにトムの「怒り」の根拠がある。トムは庭から「不当に」しかも「ひとりぼっちで」追放されるのである。これは実はトムにとって「牧歌的世界への訣別」を意味する象徴的な出来事でもあった。

叔母夫婦のアパートはもとは大きな屋敷であったものを、幾つにも仕切って何軒かの家族に貸してある。三階には家主で高齢のバーソロミュー夫人が住んでいる。屋敷のホールには古めかしい大時計があって百年近い時を刻み続けている。トムは麻疹の潜伏期間の可能性があるために叔母のアパートから外へ出歩くことは許されない。これは病気になってもいない遊び盛りの少年にとってはかなり厳しい状況であった。昼間は叔母の米養満点の料理を食べるだけで適度な運動もしないためにトムは夜になっても寝つくことができない。トムの唯一の慰めはピーターに手紙を書くことであつた。

2.大時計と「夜の 13 時」

闇の中で大時計の時を打つ音に耳を澄ませていると、奇異なことが起こった。夜の 12 時を打った後、1 時を指して 1 回打つはずの時計が 13 回鳴ったのであった。それはまるで、常識を越えた別の時間の存在をトムに示唆しているかのようであつた。

Now the clock had struck thirteen, affirming that—for this once at least—there was an extra thirteenth hour.(16)

大時計が 13 時を打って——少なくとも今回だけは——余分の 13 番目の時間があるのだとうけあっているんだ。

トムは好奇心にかられて階下の大時計を調べに行く。針が何時をさしているのか、文字盤には 12 時と 1 時の間に別の文字が存在するの否かを見届けるつもりであつた。月明かりに誘われて裏庭に通ずるドアを開けたトムは驚愕する。叔母たちには、この建物には庭はついていないといわれていたのに、そこには広々とした庭が広がっていたのだった。

朝になってまた見に行くと庭はなくなっていた。それからのトムは昼間はおとなしくして、ひたすら夜を待った。そして、大時計が 13 回時を打つとベッドから抜け出し、庭に入っていく。この不思議な庭とこちら側の世界を行き来する主人公トムとは対照的な人物として描き出されるのが、トムの叔父アランである。彼は 13 回時を打つ時計に対し、そこに何か不思議な秘密があるのではないか、などとは考えない。あくまでも時計の調子がおかしくなっていると判断し、安眠を妨害されたことに苛立ち、時計の持ち主に悪態をつく「現実的で常識的な大人」として描写されている。

The grandfather clock was striking on and on. Upstairs Alan Kitson, wakened by it, humped his shoulders fretfully: 'It's midnight. What on earth does the clock think it's striking.... Striking hours and hours that doesn't exist. I only hope it's keeping Mrs Bartholomew awake, too!'(34)

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈樂園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

大時計は時を打ちならし続けていた。二階ではアラン・キトソンがその音に自を覚まして、苛立たしげに肩をまるめた。「今は夜中だよ。一体全体、あの時計は何時を打っているつもりなんだ。存在してもいない時間を次から次へと打ちならしたりして。バーソロミュー夫人の目も覚ましてやればいいんだ！」

一方で当のバーソロミュー夫人はどうかといえば、時計の乱れた時の打ち方に目を覚まし、いらだつ事はない。彼女は微笑みながらぐっすりと眠っている。子供の頃の夢を見ているのである。

...in a smile of easy, sweet-dreaming sleep. She was dreaming of the scenes of her child-hood. And the grandfather clock still went on striking, as if it had lost all count of time; and, while it struck, Tom, with joy in his heart, drew the bolt...walked out into his garden, that he knew was waiting for you. (35, 下線は論者による)

そして大時計はなおも打ち続け、その間にトム少年は喜びに満ちて、ドアの門を引き抜き、「自分の」庭に歩を進めていくのである。トムは庭が自分を待ち続けていることを知っているのである。

ここには大時計に対する三者三様の態度が示されている。アラン叔父の常識的態度、バーソロミュー夫人の動じない態度、そして「常識」からは完全に逸脱したトムの態度である。

3. トムの〈樂園回復〉

庭の中でトムは一人の少女に出会う。彼女の名はハティ。両親を亡くした彼女は叔母に引き取られて、この屋敷に住んでいる。叔母には厄介者扱いされ、従兄弟たちには相手にされないハティは庭の中で一人で遊び、自分は実は「お姫さま」であるが、このような姿に身をやつしているのだとトムに言う。それはハティの「戯れ言」であることが後に分かるが、彼女は確かにこの庭を「自分の王国」のようにして過ごしていたのである。

She had made this garden a kind of kingdom (81)

ハティとトムは互いに共鳴しあうものを感じ、一緒に遊ぶようになる。トムは毎晩、大時計が 13 回打ち、自分とハティが共有する時間、常識的な時間を超越した時間の到来を待って、庭に出て行き、ハティと遊ぶのである。

Every night he was able to steal downstairs as usual, into the garden.... He played with Hatty. (101)

互いの存在を不思議に思い、互いを幽霊かもしれないと思いつつも二人の友情は深まっていく。ハテ

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

ィの世界ではトムの姿は他の住民からは見えてはおらず、トムは自分を透明人間のように感じ、庭の申で気儘にふるまう。庭にはトムの時代とは異なる時間、異なる季節が流れている。また、トムの時代と庭で過ごす時とでは、時間の流れ方が全く異なっている。トムがさんざん庭で遊んで自分の部屋に戻って来ても、時計は 12 時 6 分を指していた。⁷

トムはただ姿が見えないだけではない。ハティの世界ではトムの実体は極めて希薄であり、トムは自分一人の力ではドアをあけることさえできない。折れかけた木の枝にトムが乗っても枝は何ともないが、うっかりその枝に乗ったハティは枝が折れて木から「落ちて」怪我をしてしまう。

この時、庭番のアベルが大急ぎで駆け寄ってハティを抱いて屋敷に運びこもうとする。トムもあとについて行く。いつもハティを見守ってきたアベルは、後に付き従うトムを睨んで、「おまえは地獄から来たのだから地獄へ戻れ、おまえの悪魔の所業はいつも分かっていた。おまえはこの子の無知に付け込んでこの子を惑わし殺そうとしてきた」と言う。

‘Get you back to Hell, where you come from!’ ‘You’ve tried to kill her often enough—her that had neither mother nor father nor home here—nothing but her innocence, against your devilry with bow and arrows and knives and high places.’(131)

トムの姿はハティだけに見えていたのではなかった。信心深いアベルにも見えていたのだった。しかし、アベルの目にトムはハティを誑かし破滅させようとする「悪魔」として映っていたのだった。そしてトムの目の前で屋敷のドアはびしゃりと閉められてしまう。召使の出入りを利用してようやくハティの部屋に辿りついたトムは、彼女に付き添う。ハティの「腕に自分の腕を重ねて」床の上で寝入ったトムが、朝になって目を覚ますと、叔母のアパートの自分の部屋でベッドの横の床の上で寝ていたことに気がつく。

4. 謎の解明

トムは百科辞典を調べ、衣服から判断してハティの時代がビクトリア朝であることを突き止める。ハティの時代も幻ではなく、トムの時代も確かに存在する。現代に生きるトムがなぜ、百年近く昔のハティの時代に入りこんでしまうのか、依然として謎は残る。

二人はその秘密が広間の大時計にあるのではないかと考える。なぜなら、屋敷の中の状態が大きく変化し、庭も無くなってしまった今、トムの時代とハティの時代を繋ぐのはこの大時計だけだったからである。大時計はハティの時代にもトムの時代にも変わらず時を紡ぎ続けているからである。

...the grandfather clock, that measured out both his time and Hatty's...(148)

⁷ この作品における時間の流れ方は『ナルニア国年代記』における時間の流れ方を想起させる。詳細は『東京成徳短期大学紀要』第 18、19、20、21、29 号、他における『ナルニア国年代記』に関する拙論を参照されたい。

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈樂園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

時計盤の下には「もはや時はない time no longer(162)」と書かれていた。そしてさらに文字が書かれている。ようやく鍵を手に入れた二人が蓋を開けるとそこに書かれていたのは、「黙示録」第 10 章 1-6 節であった。

‘And I saw another mighty angel come down from heaven, clothed with a cloud: and a rainbow was upon his head, and his face was as it were the sun, and his feet as pillars of fire: and he had in his hand a little book open: and he set his right foot upon the sea, and his left foot on the earth, and cried with a loud voice, as when a lion roareth: and when he had cried, seven thunders uttered their voices.

And when the seven thunders had uttered their voices, I was about to write: and I heard a voice from heaven saying unto me, ‘“Seal up those things which the seven thunders uttered, and write them not.” ‘And the angel which I saw stand upon the sea and upon the earth lifted up his hand to heaven, and sware by him that liveth for ever and ever, who created heaven, and the things that therein are, and the sea, and the things which are therein, that there should be time no longer.(165)

そしてわたしは見た。もうひとりの強い天使が雲に包まれて天からおりた。頭に虹をいただき、顔は太陽のようで、足は火の柱のようであった。手には開かれた小さな巻物を持つ。右足を海の上に、左足を地の上に置き、獅子が吠えるように大声で叫んだ。叫ぶと、七つの雲が、おのおのの声で語った。七つの声が語ったとき、わたしはそれを書こうとした。すると天から声を聞いた。いわく、「七つの雷が語ったことを封ぜよ。それを書くな」と。そして、わたしが海と地との上に立つのを見た天使は右手を天に上げて誓った。誓いをかけたのは世々としえに生きたもう方、天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造された方である。いわく「もはや時はない」⁸

それからのトムは真剣に「時」について考えるようになる。唐突に質問して叔父のアランを当惑させたりもする。その間にも日々は移り過ぎ、トムは麻疹に感染していなかったことが判明する。トムが家に帰る目が近づいて来る。

5. 庭との訣別と再会

トムは永遠にハティの世界の中に止まろうと決心する。それは今までの経験から、どれほど長くハティの世界にいても、裏口の扉をしめてこちら側の世界に帰ってくると殆ど時間がたっていないという結論に到達したからである。しかし、会うたびに少しずつ成長していたハティは、トムが帰宅する二日前に会った時にはすっかり成長した妙齢の女性になっている。そして、ハティの心の中では庭以外の世界が大きな存在を占めるとともに、トムとは別の成熟した異性、パーティニ世の存在が大きな比重を占めるようになっていく。トムとハティは二人で氷結した川を滑ってイーリーまで行き、楽しい時間を過ごす。その帰りにパーティニ世に出会う。パーティニ世はハティを馬車で家まで送ると申し出る。ハティとパーティニ世の話はおとなの話でト

⁸ 聖書日本語訳は、前田護郎訳『新約聖書』(中央公論社、1983年)を使用した。最後の「もはや時がない」の部分は野呂訳。前田訳では「もはや猶予しえない」である。

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈樂園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

ムにはまったく興味がなかった。そして自分の計画をハティに話すつもりであったトムであるが、「心が空っぽになり始め his mind fell into vacancy(205)」眠り込んでしまう。

目を覚まして、グウェン叔母さんのアパートに戻っていることに気付いたトムは、最後の夜に望みをかける。「今度は決して眠るまい、好きなだけハティの世界に、あの庭にいてやろう」と決心して裏口の戸を開け、真っ暗な「庭」に踏み出したトムであるが、そこには「ハティと共有する庭」はもはや存在しなかった。

永遠に庭を失ったと思い込んだトムはパニックに陥って声を限りにハティの名を呼ぶ。その声に眠っていたアパートの住民みんなが、そしてバーソロミュー夫人が目を見ます。実はバーソロミュー老夫人こそ、ハティその人であった。ハティ・バーソロミューは、自分が過去に子供であった時に享受していた庭の思い出を胸に抱き、そしてそれを毎夜、夢の中で反芻していたのであった。その庭をトムは「夜中の 13 時」に——すなわち通常の時間の流れとは別の時間の中で——ハティと共有したのである。

名を呼ばれて眠りから覚めるというシーンは我々に『樂園の喪失』第五巻冒頭を耳に起こさせる。ただし、イヴはアダムに起こされて悪夢から覚めるのであるが、『トムは真夜中の庭で』の場合、パニックに陥っているのはトムであった。この時バーソロミュー夫人は 60 何年も昔の「聖ヨハネ祭の日」に行われた自分の結婚式のことを夢に見ていたのであった。第五巻冒頭のアダムからイヴへの呼びかけの言葉がもともとは『聖書』の「雅歌」第 2 章 10-13 節の花婿から花嫁への呼びかけを下敷きにしていることを考え合わせると、トムがハティを呼ぶことはいっそう重要な意味を持つ。二人は少なくとも「真夜中のトムの庭」においてはお互いに掛けがえのない存在だったことが浮き彫りになるからである。

『トムは真夜中の庭で』という物語においては、結婚における男女の結びつき以外にも、世代を越え、時代を越え、空間を超越した男女の共感、意志疎通の可能性が追求されている。このような男女の結びつきは、ある意味で「牧歌的」であり、やがては成熟した男女の結婚という結びつきの前で、脆くも崩れさり、忘却の淵に取り残されてしまうかのように見える。しかしそれは真実であろうか。いかに強靱な結婚愛もいつの日か、配偶者の死によって終結を迎えるのである。二人が同時に死ぬのでなければ、こうした結末は避けようがない。人間は老境に入った時にもう一度、幼い日に確かに保持していたのと同じように、結婚愛とは別の男女の共感の形を共有し得るのではないか、という問題を作者ピアスは我々に突きつけているのである。

アラン叔父から説明を聞いたバーソロミュー老夫人は、今まで自分が毎夜見ている夢の中に出てきた少年が、現実に存在し、しかも自分のアパートの住人の甥であったことを知った。翌朝、トムを部屋に招き寄せた夫人は、辛抱強く自分がハティであること、二人が共有していた庭が自分の思い出の中の庭であったことをトムに理解させようとする。「最後の機会を失い、庭も失ってしまった [...had lost his last chance; he had lost the garden (215)]」トムに、バーソロミュー老夫人は、人生を長く生きてきた人物であればこそ可能な、人生の神秘と喜びを伝えようとするのである。

...said Mrs Bartholomew patiently: 'I'm Hatty.' (218)

バーソロミュー夫人は辛抱強く言った。「わたし、ハティよ」

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

The garden gone.... (218)

「庭はなくなってしまったわ」

Her black eyes were certainly like Hatty's; and now he began to notice, again and again, a gesture, a tone of the voice, a way of laughing that reminded him of the little girl in the garden (219)

バーソロミュー老夫人の黒い瞳は確かにハティの瞳を思わせるものだった。そして今トムは、あの庭にいた小さな女の子を思い起こさせるしぐさ、声の調子、笑い方などに次々と気づき始めた。

ついに神秘を理解したトムは、バーソロミュー老夫人にささやく。

‘You were Hatty — you are Hatty! You're really Hatty!’ (219)

「あなたは昔ハティだった。あなたは今もハティだ! あなたは本当にハティなんだ!」

ここでどうとう、過去と現在と永遠がトムの中に統合されたのである。「黙示録」第 10 章 1-6 節の天使の言葉がトムなりのレベルで理解されたのである。さらにハティの話は続けられる。

... my childhood and all the times I had spent in the garden——in the garden with you, Tom.(221)

わたしの子供時代とわたしが庭で過ごしたすべての時間——トム、あなたと一緒に庭で過ごした時間よ。

... then even the garden. The garden had quite gone,(223)

そして庭でさえそうなよ。庭もまったくなくなってしまったの

Over this, they settled down to talk of the garden C226)

二人はお茶を飲みながら、庭の話にとりかかった。

... the garden was changing all the time, because nothing stands still, except in our memory. (223, 下線は論者による)

「庭はいつも変化し続けていたのよ。だって、変わらずにそのままのものはなんて存在しないのよ、ただわたしたちの記憶の中でだけはそのままなの」

We're both real; Then and Now. It's as the angel said: Time No Longer.' (226)

わたしたち二人とも幽霊じゃないの、現実存在しているのよ、あの時も今も。あの天使が言ったように、もはや時はないのよ」

こうしてハティ・バーソロミューはトムに、失った楽園は回復することができるという、人生の神秘を確信させるに到るのである。

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

6. 「庭の思い出」——楽園の内在化

トムは自分の家の庭を〈かけがえのない場〉として弟と共有していた。そして、この慣れ親しんだ庭を一時的に喪失するという〈楽園喪失〉体験をした。叔母の家においてトムは弟ピーターに手紙を書くのであるが、それは一度喪失した二人の共有する時を改めて確認し、内在化するという作業でもある。いわば、ピーターに手紙を書くということは、喪失した庭、喪失した時を二人の心の中に「内面化」という象徴的行為となっているのである。

さらにトムは隔離のために移動した叔母の家で今まで以上の庭を獲得するという〈楽園回復〉体験をした。しかし、やがてその庭をも喪失し、またもや〈楽園を喪失〉してパニックに陥る。しかしその庭が実は、〈楽園喪失〉を体験した老婦人が自己の記憶の中に内面化した〈内なる庭〉であったことを発見する。この時トムは学んだのであった。人間はだれもが、自分にとっていかに〈かけがえのないもの〉であっても、やがてはそれを喪失するという辛い体験を避けることはできないということ。しかしその〈かけがえのないもの〉は永遠に失われてしまうのではない。われわれは〈記憶の中に刻みつける〉という〈内面化・象徴化〉の過程を経ることによって、喪失したはずの〈かけがえのない時、かけがえのない場〉を永遠に自己の内面に回復することができるのである。しかも、この〈内面化された庭〉は、自分だけの私物として死蔵されてしまうのではない。それは時間と空間を超越して、他者と共有できる可能性を孕む〈開かれた庭〉なのである。

‘But you’ll come again!’ cried Mrs Bartholomew. ‘And what about that brother of yours, that I saw in Ely—what was his name?’

‘Peter,’ said Tom, and started guiltily to think how he had forgotten Peter, first of an in the horror of losing the garden, and then in the amazement and joy of finding it again in Mrs Bartholomew’s remembrance. (228)

「だけど、またいらっしやいね。そしてイーリーでわたしが会ったあなたの弟も一緒に来たらいいじゃないの。なんという名前だったかしらね、あの子は？」とバーソロミュー夫人が言った。「ピーターです」とトムは答えた。そしてまず第一に庭を失う恐怖の中で、そして次に、バーソロミュー夫人の思い出の中に庭を再発見した驚きと喜びの中で、ピーターのことをすっかり忘れていたことをすまないと思いはじめた。

トムからの手紙によって、真夜中の〈過去の庭〉で遊ぶ喜びをトムと共有していたピーターは、トムからの便りがなかった時に、トムの世界へ入りたいと強く希望して、ついにハティの夢の中に入って来た。夢の中でピーターは、トムとハティ二人だけの共通の空間をほんの一時共有したのであった。ここですでに、第三者が強く願えば〈内面化された庭〉すなわち〈理想の共同体〉を共有できる可能性が、作者ピアスによって読者に示されているのである。

『楽園の喪失』の最終部でアダムとイヴは楽園を追放される。しかし彼らは絶望の内に楽園を後にするのではない。なぜなら、彼らの心にはしっかりと「内なる楽園」として楽園の記憶が刻まれ内在化されてい

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

るからである。⁹ そしてその事は彼らの結び合わされた手に象徴されている。

The World was all before them, where to choose

Thir place of rest, and Providence thir guide:

They hand in hand with wandring steps and slow

Through Eden took thir solitarie way.

安息のところを選ぶべき世は眼前に

ひろがる。摂理こそかれらの導^{しるべ}者。

手に手をとって、さ迷いの足どりおもく、

エデンを通り、寂しき道をたどっていった。

『トムは真夜中の庭で』においては〈内面化された庭〉は、トムとハティが——外見は 10 歳ほどの少年と 80 歳を過ぎた老婆の姿ではあるが——互いに抱き合う姿の内に象徴されている。一度はよそよそしく形式的な別れの挨拶を交わしたトムとハティであった。しかし、トムは一度降りた階段をもう一度かけあがり、そこで〈永遠の相の下にいる〉ことを象徴する姿勢をとっているハティを抱きしめるのであった。そしてここでこの物語が終わっていることは極めて象徴的である。

、
…he turned impulsively and ran up again... to where Hatty Bartholomew still stood... he put his arms right round her and he hugged her good-bye as if she were a little girl.’ (228-229、下線は論者)

トムは衝動的にふりむくと、また階段を駆け上がっていった……ハティ・バーソロミューが依然として立ちつくしている所まで……トムは彼女の身体に腕を回すと、まるでバーソロミュー夫人が小さな女の子でもあるかのように彼女にさよならを言って抱きしめたのよ。

すでに見たように、『楽園の喪失』においてはアダムとイヴが共有する〈内なる楽園〉は二人の結び合わされた手に象徴されていた。一方、『トムは真夜中の庭で』においては、「少年のアダム」と「老婆のイヴ」の共有する〈内なる庭〉は二人の抱き合う姿に象徴されている。二人は互いを抱きつつ、互いの胸に秘めた「庭の思い出」を抱きしめているのである。

グエン叔母さんという、「現世の大人の世界」すなわち「直線的に流れて決して円環的には流れることのない時間」の住人を象徴する人物の目には、老婆にしか見えないバーソロミュー老夫人の中に、「かけがえのない庭」を自分と共有する「少女」が息づいていることをトムは知っている。それはトムが「円環的に流れる時」が人間の心の中に存在することを知っているからに他ならない。そしてバーソロミュー夫人もその事を知っており、トムの弟ピーターもこの永遠の時の輪に加わる事が出来るのである。そしてその輪には、「円環的に流れる時」が人間の心の中に存在すると知っている者ならだれもが——老若男女を問わず——参加することが許されているのである。

⁹ Lous Martz, *The Paradise Within* (New Haven, 1964) p.200.

野呂有子 「『トムは真夜中の庭で』におけるミルトンの主題—「黙示録」第 10 章 1-6 節と〈楽園回復〉—」『東京成徳短期大学紀要』第 31 号(1998)13-22.

7. 「密やかに立つ stand still」——永遠の時への通行手形

かつて筆者はミルトン作『楽園の喪失』、C.S.ルイス作『ナルニア国年代記』、T.S.エリオット作『四つの四重奏』を結ぶキーワードが「堅く密やかに立つ=stand still」であること、そしてこの姿勢が絶対者に対する人間のあるべき姿を象徴する姿勢であると指摘した。(『東京成徳短期大学紀要』第 29 号『ナルニア国年代記』におけるミルトンの主題)さらに、この言葉は『秘密の花園』においてもキーワードとして重要な機能を果たしており、それは、メアリーが花園の入り口を見つけ出す過程において注意深く使用されている言葉であることを明らかにした。(『東京成徳短期大学紀要』第 30 号『秘密の花園』におけるミルトンの主題)人は「密やかに立ちつくす=stand still」時、永遠の時間、永遠の命にあずかると感じる。“stand still”とは人が神との信頼関係に立ち永遠の命にあずかると感じる時に取る姿勢なのである。上記のハティ・バーソロミューの姿の描写は、われわれに『楽園の喪失』第 7 巻 507-509 行の、創造されたばかりの(すなわち、墮落以前の)アダムの描写を思い起こさせる。

but endued

With sanctity of reason, might erect

His stature, and upright with front serene

汚れなき理性をさずけられ、すくと立ち

しずかなるひたいをまっすぐにもちあげて、

「黙示録」においては、最後の時に世界が再統合され、もはや時のない永遠の世界が現出する。¹⁰『トムは真夜中の庭で』においてはまだ、時は満ちてはいない。そして我々の住む現実の世界も同様である。しかし、その兆候がまったくないわけではない。その時は少しずつ始まっているのかもしれない。少なくとも、広間の大時計は時が満ちて、「もはや時のない」世界が到来する事を象徴しており、トムとハティはひと夏ではあったが、その永遠の時の一端に連なるという体験に与ることができたのである。ハティの思い出の中で庭は「変わらずに立っている stands still」—そしてトムの思いを受け止めようと、ハティ自身も階段の上で「依然として立ちつくしていた still stood」。ハティの思い出の中の庭はトムを「待ち続け」ており、ハティ自身も庭の中でトムを「待ち続け」ていたのであつた。かくして、〈庭に立つ〉とは、神への能動的姿勢を示す言葉であり、有限の時間内に生きる我々人間が〈永遠の時間〉、〈永遠の生命〉に連なる鍵語となることが『トムは真夜中の庭で』における女主人公ハティ・バーソロミューの姿からも明らかになったといえるのではないだろうか。

¹⁰ この問題に関しては『ナルニア国年代記』におけるミルトンの主題——『最後の戦い』を中心として——」においても論じられている。詳細は同論文を参照されたい。